

C. K. ドージャーの使命と理想（上）

堤 ともみ

◇はじめに

1916年に創立された西南学院は、7年後に100周年を迎える。キリスト教信仰のもと、学院創立に心血を注いだC. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier, 1879-1933）について研究を深めたい。学院にはドージャー自筆の手紙や日記、論説等が大切に保管されている。それら資料に基づいて、ドージャーの日本における使命と彼が描いた理想を研究する。その際、ドージャーの生涯がキリスト教信仰に深く根ざしていた事実を考慮し、キリスト教信仰を重要な視点とする。

◇手紙と論説における「キリストに忠実」

多くの資料のうち、ドージャーが書いた手紙と論説の2種類を取り上げる。まず西南学院創立の頃にアメリカのミッション・ボード（外国伝道局）との間にやり取りされた2通の手紙から考察する。次いで、校友会雑誌に掲載された3つの論説について考察する。

第1節 手紙：西南学院創立の使命

ドージャーがアメリカのミッション・ボードに宛てた2通の手紙は、西南学院創立の前後に書かれたものである。彼は福岡バプテスト夜学校の校長を務めながら、男子中学校創立の願いをボードに出し、西南学院創立に尽力していた。またボード側の資金難や学校創立に対する無理解等の問題を抱えながらも、ドージャーをはじめとした宣教師団の熱烈な要望が実現していく時期であった¹。2通の手紙の宛名は違っているが、ボードの主事であり通信委員だった人物へ宛てた手紙で、日本での活動報告書という公的な意味を持つ。しかし公的とはいえ、その中にドージャーの人柄や切実な願い等が溢れ出ている。

1 当時、ドージャーは南部バプテスト宣教師団の中では書記を務めていた。

(1) スミス宛手紙

1) 手紙の位置づけ

W. H. スミス (W. H. Smith) 宛手紙は1915 (大正4) 年4月12日付で、これは私立西南学院創立の前年にあたる。ボードから在日宣教師社団宛に、同年4月からの予定で男子中等学校創立許可の連絡が届いていた。しかし、第1次世界大戦の勃発により予定されていた募金が十分に集まらず、1916 (大正5) 年4月に開校が延期された。ドージャーは開校を前にして他校の調査を行い、学院創立の目的・計画・規則等を定めるとともに、西新の土地購入やボードへの資金援助要請で忙しく過ごしていた。

2) 手紙の概要

手紙は便箋5枚に手書きで綴られている。

冒頭でドージャーは、前回手紙を書いて以来、時間が過ぎてしまったと述べ、やるべきことが多く忙しい状況を説明している。

第1段落では、福岡バプテスト夜学校での状況を報告している。施設面に対しては生徒から整備を求める声が上がっている。生徒は仕事で一日中忙しく日曜日でさえ休む暇がないほどだが、内容的には充実した学びの時となっている。ドージャーにとって彼らにチャペルで話ができるのは大きな喜びであり、刺激になっている。週4回、60人の生徒にキリスト教を教えるのは侮れない機会となっている。

他の日本人との交流の機会もあり、週2回、市内の銀行に勤める者たちがやってきて宗教の議論をするという。彼ら日本人は仏教には関心がなく、宗教は迷信だと捉えている。しかし宗教性を全く持たないわけではなく、道徳的であるのは大切だと考えている。そのような彼らの一人が聖書を学びたいと言って教会に2回出席したと報告している。ドージャーは、彼らとの交流を通じて日本人の宗教観を把握している。また、相手の意見を十分に聞いた上で、語りたい事柄を率直に語っている。

第2段落では、風雨の中、一人の若者が川でバプテスマを施し、濡れた服のまま次の説教会場に向かわざるを得なかった状況を報告している。

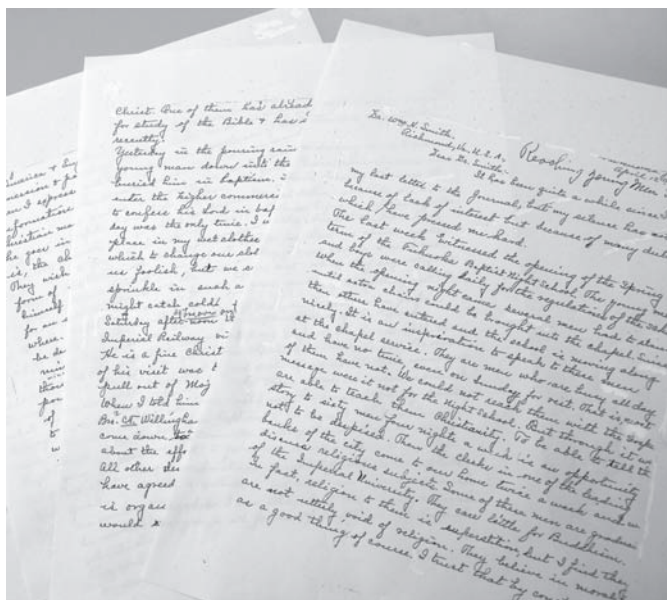
第3段落は長い。九州帝国鉄道の重役 (the superintendent of the Kyushu Imperial Railway)²から、合同教会に関する相談を受けた報告である。各教派を統合した合同教会を作る試みが門司にあり、バプテスト派も門司から引き上げ、合同教会に参加しないか尋ねるのが彼の目的であった。相談を受けたドージャーは、バプテスト派としては同意できないと伝えながらも、彼の信仰者としての態度には敬意を払っている。

2 枝光氏によるとこの人物は、九州鉄道管理局長の長尾半平である。枝光泉『宣教の先駆者たち』(ヨルダン社、2001)、40頁を参照。

熱心なキリスト教信者で社会的地位の高い人物でありながら、どこでもキリストの証人となり、信念を持って活動している人物と評価している。その上で彼らの問題解決のために聖霊の導きを祈っている。ドージャーはバプテスト派の代表として冷静に意見を述べるとともに、温かな視線で彼を捉えている。

第4段落では、まず教会の日曜学校の報告をする³。日曜学校は最新の方法でうまく運営され、人数が増え具体的な活動も報告している。次に、男子校つまり西南学院の創立に向けてこれから忙しくなると述べており、祈りと援助を要請している。福岡の人々にキリスト教を伝道することは、彼の喜びとなっている。

第5段落では、ボードのために祈っている旨を伝えている。そしてボードに対する感謝とともに、日本でもできる限り儉約に努めていると報告する。これから夜学校に行くこととし、最後の挨拶で結んでいる。



ミッション・ボードに宛てたドージャーの手紙

3 報告されているのは現在の大手門近くの簗子町にあった福岡バプテスト教会だと考えられる。

3) 手紙の分析

西南学院の創立を前にしたドージャーが、その準備だけでなく様々な活動に携わって忙しく過ごしている様子がわかる。夜学校の校長として教育活動に従事するとともに、宣教師として信徒にバプテスマを授けている。またバプテスト宣教師団の代表的な立場にあって相談を受けるなど、幅広く多様な役割を誠実に果たす姿が浮かび上がる。伝道の喜びが根底にあり、相手のために祈り感謝を述べ、キリスト教信仰を土台として行動している。

(2) レイ宛手紙

1) 手紙の位置づけ

T. B. レイ (T. B. Ray) 宛手紙は1916 (大正5) 年4月16日付で、私立西南学院が1916 (大正5) 年4月11日に福岡市大名の地で開校した後のものである。1915 (大正4) 年4月の開校予定が、第1次世界大戦勃発によるアメリカの不安定な状況のため延期になった末の開校であった。西新の土地選定はできたものの、購入資金や校舎の建築、運営費用等の金銭的問題は残ったままで、しかもボードからの支援は思わしくない状況にあった。

2) 手紙の概要

手紙は便箋4枚に手書きで綴られている。

冒頭の第1段落から第3段落において、学院創立の成功と開校式の報告をしている。105人の男子を迎えての開校式であった⁴。式には来賓をはじめ多くの出席者があり、福岡市長をはじめ教会関係代表者など多くの人から祝辞を受けた。出席者全員が満足な様子であった。申し分のない開校式を、ドージャーはボードに対して感謝している。

定員105人の男子の確保は難しいと言われていたが、その年の受験者は117人で、入学資格年齢を15歳と絞らなければ200人から300人の受験者が見込まれた。初年度については入学者不足の心配がなかった状況を説明している。市長からは他のキリスト教主義学校で成功している例が示され、失敗する恐れは全くないと言われた旨を伝え順調さをアピールしている。

第6段落では、生徒に神の言葉を語ることのできるドージャー自身の喜びを語っている。毎朝チャペルで生徒に神の言葉を語り、週1時間の聖書の授業も組まれている。今は100人ほどの生徒であるが、今後は300人、400人に対し、週6日キリストについ

4 実際には1人の辞退者が出ていた。

で教えることができるようになる。このようなチャンスをもつ伝道者はほとんどいないだろうと今後のヴィジョンを語っている。同時に投資対象としてこれほどの好条件はないだろうと、ボードに投資の有益さを訴えている。

一方で、学院の経営が気を抜けないと書いている。その上で、校舎建築の早急な必要を訴えている。第5段落以降でも、資金援助の要請と西南学院の評価の高さ、投資の妥当性を繰り返し述べている。南部バプテストはこれほどのチャンスを掴んだことはないとも述べている。第5段落、第7段落、第9段落では、土地購入と校舎建設の必要に迫られているものの、身動きが取れない窮状を伝え、ジャドソン百周年基金⁵から早急な拠出を求めている。全額の送金が無理なら半額でも欲しいと訴えており、金銭問題の切迫がわかる。

第4段落では初代院長條猪之彦への言及がある。條院長は開校式で西南学院の目標を明確に述べ優れた挨拶をした。しかし体調がすぐれず入院しており7月頃まで休むようである。そのためドージャーが院長の仕事も果たしている。それでも條氏に対するドージャーの信頼は厚く、健康が回復すれば彼に留まって欲しいと述べている。

第10段落は福岡バプテスト夜学校に触れている。48人の出席者で始まり人数は増える予定である。しかし夜学校の校長としての職務と昼間の西南学院の職務の長期にわたる両立は力不足のため、不安を取り除いて欲しいと願いつている。また職員の給料等の心配もしており、激務に追われていた様子がわかる。

最後に生徒を教会に連れてきて学生寮で手紙を書いている状況を説明している。生活すべてを生徒のために費やし忙しく過ごしている様子が描かれている。結びの挨拶では建物のための資金が手に入れば、学院は有望な存在であると再度触れ、手紙を終えている。

3) 手紙の分析

西南学院創立にこぎ着け開校式を成功裡に終えた喜びの報告と、資金がボードから届かない状況で資金提供を求める切実な訴えがある。成功を伝える報告にも、これだけの評価を受けているから資金提供を求めたいという願いを込めている。切実な訴えはボード側に届いて反響を呼び、ボードから学院に対する6000ドルの寄付が承諾される運びとなっていく⁶。粘り強く繰り返し学院への投資の必要性和有用性を訴え、それが状況を動かしている。ドージャーの行動力を顕著に見ることができる。

5 A. ジャドソン (Adoniram Judson, 1788-1850) のピルマへの外国伝道100年の記念基金である。

6 西南学院編集『SEINAN SPIRIT - C. K. ドージャー夫妻の生涯 -』29頁を参照。

第2節 論説：ドージャーの理想

校友会雑誌に掲載されたドージャーの3つの論説を取り上げる。これらは、西南学院が創立されて5年以上が過ぎて学校も安定し、ドージャーは学生生徒に学院の理想を語るメッセージを発している。学生生徒への思いを通して、学院や教育に対するドージャーの教育理念を考察する。

(1) 「理想」⁷

1) 位置づけ

「理想」を『校友会雑誌第7号』に発表した1923（大正12）年は、西南学院の創立から7年目である。1921（大正10）年に中学部の第1回生が卒業し、高等学部を開設する。1922（大正11）年には神学科を増設し、学院は着実な歩みを進めていた。ドージャーの生涯で捉えると44歳の時であり、1933（昭和8）年に54歳で亡くなるちょうど10年前である。ドージャーの院長としての力量が十分に発揮され、学院経営が軌道に乗って安定してきた時期である。しかし、それからの10年は苦悩の多い時期になっていく。

2) 「理想」の概要

ドージャーは学生生徒に「勝利に満ちた生涯」⁸を送って欲しいと語る。それは有意義で喜びに溢れたものであり、しかも純粹で高貴なものである。そのためには、高い理想を持つべきであるが、理想は単なる概念ではない。優れた人物の具体的な行動の中に現れる。例えば兵士には勇気が、政治家には知恵が、ビジネスマンには聡明さが、そして宗教指導者には純粹さと高貴さが体現されている。また人生には法則があり、描く理想で人生は規定される。

勝利に満ちた生涯を送るために必要な「純粹さと高貴さ」は、宗教指導者に体現され、彼らは最高の思想である「哀れみと愛」を行動に示す。高貴な生活には彼らが模範となる。つまり理想の人物が高貴な思想の持ち主で純粹な行動をする人物であれば、私たちが描いた理想のようになれる。だから私たちは哀れみと愛の体現者を理想とし、純粹で高貴な人生を歩むべきである。

キーワードは「真実」である。理想の人物を思い描きつつも、理想は観念に終わってはならない。理想を実現させるためには燃えるような願いと、真実を求める生活が

7 1923（大正12）年発行の『校友会雑誌第7号』に掲載されたもので、原題は“IDEAL”である。

8 原文では ‘a victorious life’ である。

常に必要となる。真実を求め真実を愛すると、真実を生きることになる。理想を求める生き方は真実を求める生き方である。

ここでイエス・キリストが語られる。「キリストは真実」であり、真実が人となった姿である。理想の体現者がキリストである。つまり、キリストを求めキリストを愛する生き方によって、キリストを生きるようになる。これはまた、キリストを求めキリストを愛する生き方によって理想を生きるようになる、とも表現できる。

最後に、ドージャーは総括的にまとめている。彼から学生生徒への祈りのような想いを、キリストから弟子への祈りになぞらえて表現している。天の父なる神が完全であるように、学生生徒にとって完全なものになることが目標である。ただし完全になるためには条件があり、時間はかかるが完全を求める努力が必要である。不完全な生活で満足しては達成できない。しかし、キリストが生きた完全な模範であり、キリストを理想にしてキリストに習えば、完成へと導かれる。そうすれば、結果的に有意義で喜びに溢れ勝利の生活の領域に入っていく。これがドージャーの言う理想であり、勝利に満ちた人生を意味している。

(2) 「西南学院から生徒諸君への贈り物」⁹

1) 位置づけ

「西南学院から生徒諸君への贈り物」が『学友会雑誌第8号』に発表された1925（大正14）年は西南学院創立から9年目で、ドージャーは46歳であった。「理想」を発表した1923（大正12）年から2年後になる。創立10周年を前に1年分の説教集「日々の糧」を編集・発行した年でもあり、自らの主張を積極的に発信していた。

2) 「西南学院から生徒諸君への贈り物」の概要

ドージャーから学生生徒への問いかけで始まり、それに答える形で論が展開する。最初に「西南学院からの贈り物」を明確に示す。それは神の認識を与え、心の中に唯一なる神への敬意を植え込むことである。一般に学校が与える知的訓練だけではなく、西南学院においては神を教える。神は宇宙とその法則の創造者であり、仰ぎ見るべき存在である。いつも全てを見ておられ、父親が息子を愛するように皆を愛している。悪に打ち勝ち純粋な生活を送るよう望んでいる。

神を仰ぎ見るべき理由は3点ある。1点目は、人間は崇拜し礼拝する対象に似ているからである。2点目は、神は一部の人々の神ではなく全ての人間の神だからである。

9 1925（大正14）年発行の『学友会雑誌第8号』に掲載された文章で、原題は“Seinan Gakuin's Gift to Its Students”である。

それは私たちが互いに愛し合うべき根拠となる。3点目は、イエス・キリストをこの世に送られたからである。人間は神を完全に認知できないが、イエス・キリストがこの世にやってきて、神の愛を伝えた。また神は人間が完全になるよう望んでいるが、人間は非常に弱く罪深い。しかし、人間の罪はキリストの十字架の死によって贖われた。人間を罪から解放し、完全なものにする道筋となったのがイエス・キリストである。

次に、永遠の命への道の重要性について語る。命は死によって終わるのではなく、身体が死んだ後も魂が生き続ける。だから永遠の時をどこで過ごすのかは、今生きているうちに決めなければならない。神とともに永遠に生きたいのであれば、神の意志に従って今を生きるべきである。

最後に、神を知るための具体的な方法を述べる。聖書を読むことである。聖書は命の言葉であり、道と真実を示している。神が示す道と真実を信じる者は幸福な人生へと導かれる。

つまり、神への敬意という種を学生生徒の心に植え込むのが西南学院の使命であり、学生生徒への贈り物であるとドージャーは説いている。

(3) 「西南学院の理想」¹⁰

1) 位置づけ

「西南学院の理想」を『学友会雑誌第9号』に発表した1926（大正15）年は西南学院の創立10周年で、ドージャーは47歳である。1921（大正10）年に高等学部を開設し1922（大正11）年には神学科を増設し、西南学院は順調に歩みを進めていた。しかし一方で、日曜日の活動をめぐる学生との摩擦を生じ、1928（昭和3）年にドージャーへの院長排斥ストライキへと繋がる「日曜日問題」¹¹の火種がくすぶり始める時期でもあった。ドージャーも長年、責任ある立場で過労と緊張を強いられており、3年後に院長を辞任した。

2) 「西南学院の理想」の概要

西南学院創立10周年を記念し、西南学院の役割を確認し実績をアピールしている。中学部で始まった学院に高等学部を増設し、さらに高等学部には神学科を加え学院の体

10 1926（大正15）年発行の『学友会雑誌第9号』掲載の文章で、原題は“SEINAN GAKUIN'S IDEAL”である。

11 日曜日を安息日として部活動等を禁止したドージャーと学生との間に生じた対立で、院長排斥ストライキに発展した。

制が整った。また神学科が西南学院の頂点に立つことを再確認している。

10年前の創立期と比較して、充実してきた様子を確認し、院長の立場から関係各位への謝意を述べている。多くの人の協力で学院が成長を遂げ、一方でドージャーの人脉の広がりが見えぬ。

学生や卒業生への謝意も述べ、学院を巣立っていく者が、日本の祝福となる願いと喜びを表現している。一方で、卒業生が西南学院の理想に立って人生を歩んでいるかを問い、学院創立の使命が果たされているかを確認している。卒業生が「仕えること」を社会で実践しているかを問うとともに、精神的にも知的にも最善のものを獲得すべきだと語っている。

次に、学院の理想や教育理念を述べている。10年間の学院の教育目標は学生生徒を高貴な理想に満ちた人生へと導くことであった。そのためには学院が教えた理想を失わず、最善でないもので満足したり前途にある苦難に負けたりせずに、犠牲を払ってでも乗り越えるべきである。

学院に学んだ者は世の価値観に流され引き下げられず、むしろ引き上げるべきで、そのためには努力が必要である。「神はみずから助くる者を助く¹²」という言葉を用い、学院の理想を実現するための具体的な行動を示す。いつも神の存在を忘れず委ねれば、神が助けてくださる。どんな時も人間には神の愛が降り注いでいるのを忘れてはいけぬ。どんなに自分の仕事で忙しくても、頭上の神を見上げるのを忘れてはいけぬ。宗教性を養う時間を失ってはならない。精神面¹³つまり神との関わりを大切にしないと人生は失敗する。

そして、勝利と意味と幸福に満ちた人生を送るためには、全人格の涵養¹⁴が必要だとドージャーは言う。知的育成および身体の育成とともに、神の認識を基盤とした精神性の育成を不可欠なものとする¹⁵。これら3側面のバランスがとれた人生を、理想の人生とする。また、神の認識を基盤にして、対外的には社会に奉仕し社会を引き上げる人材となり、内面的には常に神に委ね仰ぐよう求めている。それを忘れない人生が、勝利に満ちた有意義な人生となるとドージャーは説いている。

12 原文では“God helps those who help themselves.”である。

13 原文は‘spiritual life（霊的生活、霊性）’である。西南学院編集『SEINAN SPIRIT - C. K. ドージャー夫妻の生涯 -』85頁を参照。

14 原文では、‘cultivation of the whole man’である。

15 原文では、‘spiritual, mental and physical’である。

◇おわりに

ドージャーの手紙と論説を通して、彼が求めた使命と理想について考察する。伝道を志して来日したドージャーは、教育に携わり西南学院を創立した。手紙を貫く最大の関心事は、土地取得および校舎建築のための資金入手であった。その時点では創設資金の入手を最大の課題と見極めて行動した。また論説では、学生生徒たちに学院の理想を語った。その時点では学院の理念を根付かせるのが課題であった。その時々で取り組む課題や具体的行動は異なるが、彼の視線は常に忠実に神に向かい、西南学院の物心両面の礎を創立した。つまり、西南学院の建学の精神とされる彼の遺訓「キリストに忠実なれ」という生き方が、学院創立という使命を生み、理想を現実のものとして結実させたのだといえよう。